屋上メガネ☆

由紀琳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
屋上メガネ☆

【Ｎコード】
Ｎ６９９８Ｘ

【作者名】
由紀琳

【あらすじ】
主人公の琥子はある日、胸のあたりにモヤモヤを感じる。
それを治そうと屋上に行くとそこにいたのは…？
琥子の幼なじみの将斗も転校してきて…！
屋上から始まる琥子の恋物語。

モヤモヤ（前書き）

第1話です！

文章がうまく書けてなくて、読みづらいかもです（；´Д｀汗

すみませんm（＿＿）m

モヤモヤ

「麻衣〜！！」
「何〜？」
教室の奥に居た私の親友の麻衣は、
少しイヤそうな顔をして私の元へ寄って来た。
「なんか今日この辺がモヤモヤするから、ちょっと屋上行ってくるね」
そう言って立ち上がった私の腕を、麻衣は掴んで言った。
「なぜに屋上？？」
「外の空気吸ったら治るかな〜と思って」
私は満面の笑みで言った。
「なんじゃそりゃ！…まぁ、いいや。分かった。」
「ありがと！じゃ、行ってくるね」
「はいはい。お大事に〜」
と麻衣は少し小馬鹿にしたように言った。
そして教室をあとにした。

ホントに今日は胸のあたりがモヤモヤする。
…なんだろう？

モヤモヤ（後書き）

琥子は天然？

ここからどうなるんでしょう？？笑

屋上☆（前書き）

第２話です！
前の話、短かったですね（ノ∀、）ペチ
今回は、もう少し長く書けると思います…（笑）

屋上☆

私は麻衣と別れた後、校舎の一番上にある屋上を目指した。
階段を上り終わり、扉に手をかけた。…なぜかドキドキした。

ギィ……

厚く重い、少しサビがついた扉を開け、コンクリートの床を少し歩くと、そこに誰か居た。
村田泰佑くんだった。
彼とは同じクラスだ。しかも隣の席。なのに一度も話したことがなかった。
彼は、みんなとあまり喋らず、一人でいることが多かった。
いつも休み時間になるとどこかへ消えてしまう謎があった。
が、今日謎が解けた。ここにいたのかぁ。
「村田くん！」
私は村田くんのもとへと駆け寄った。
「…あ、矢崎さん」
私は、村田くんの隣に立った。
「矢崎さんどうしたの？なんかした？」
そう言って困った顔をした。
「うん。なんかね、胸のあたりがモヤモヤするの」
「そうなんだ。早く治るといいね。」
彼はそっけなく言った。…私、邪魔なんだな。でもせっかく二人きりなんだからあきらめないぞ。
「うん。村田くんはどうしたの？」
「俺？…別に。」

「そうなんだ。」
「……」
「……」
ヤバイ。会話が途切れた…
どうしよう、なんかないかな……あ！
「そういえば私、村田くんと話したことなかったよね？」
「…そうだね。」
またそっけない…あきらめるか！
「なんで村田くんってみんなと話さないの？」
「…めんどくさい。」
…え？そういうこと？
「そ、そうなんだ…」
そう言って彼の顔を見ると、なんだか寂しそうな顔をしていた。…？
「どしたの？」
「…何が？」
「あ、いやなんか、寂しそうな顔してたから…。」
すると彼は目を見開いていた。
…なんか変なこと言ったかな？
そう思って困っていたら、
「あ、ごめん。いきなりこんな顔されたら困るよね…」
「いや、別に大丈夫だよ！…もし良かったら、話聞かせてくれないかな？」
村田くんは絶対なんかあった。…女の勘がそう言っている。
私が返事を待っていると、
「俺の話…聞いてくれる？」
そう言ってこっちを見た。
その時の顔が、何かを決意したような、諦めたような顔だった。

この時、もうモヤモヤは消えていた。

屋上☆（後書き）

丁度いい長さですかね？（＊´∀｀＊）

やっぱり書くの大変ですね。（。´Д｀。）

村田泰佑ｓｉｄｅ－過去－（前書き）

泰佑くんｓｉｄｅでちゃいました（＊ノω＞＊）　アチャー

村田泰佑ｓｉｄｅ－過去－

これは俺が中学時代の話。

小学・中学はどことも混ざらず、そのまま学年が上がるだけだった。
なのにも関わらず…俺はいじめられた。

中一　春

「おい、泰佑。お前最近調子乗ってんなぁ。」
ソイツは、仲間の二人と顔を見合わせ、ニヤニヤ笑っていた。
「俺なんかした？したなら謝るけど。いつかな…」
「うるせんだよっ！！」
バキッ！！
「ッッ！！…イッテー…」
「ハハハハッ！…静かにしてろよ。　ハハハハッ！」
俺は殴られた。かなりショックだった。
なぜなら、仲間だと思っていたから。

俺ら４人は、何をするにも一緒だった。
遊ぶときも、ワルさするときも、登校・下校も…
何もかも一緒だった。仲間だと思っていた。
でも、勘違いだったみたいだ。
なんてバカなんだ、俺は…

中一　夏

まだアイツらからの暴行は続いていた。
でも、こいつらのを我慢してれば良いと思っていたから、
頑張って学校にも行った。

周りの友達も「大丈夫？」って声を掛けてくれた。
だから、頑張れた。
でも、違かった。
いつからか、クラスのみんなからいじめられていた。
なぜだか分からなかった。ショックだった。
無視、持ち物を汚す・捨てる、ゴミを投げる…
いじめの典型的なパターンだった。
でも我慢した。頑張って、頑張って、我慢した。

いじめは三年まで続いた。
でも学校は行き続けた。

そして、高校は知らない人しかいない所にし、
もし誰かいてもなるべく分からないように、メガネをかけた。

高校では、友達を作らなかった。
面倒なことになると嫌だから。

俺は中一の時から、心を閉ざすようになった。

村田泰佑ｓｉｄｅ－過去－（後書き）

泰佑くんｓｉｄｅ終わりました～＾＾

悲しいですね。

過去に触れて…（前書き）

サブタイトルが思いつかなかった。

続きが書けなくなって来た…（；´∀、A冷汗ｉｌ——ｌｉ

過去に触れて…

スーーーッッ……

いつの間にか私は泣いていた。
「！！何で泣いてるの？」
「…あれ？私泣いてる？」
自分の頬に手を当ててみると、涙で濡れていた。
その瞬間涙がボロボロこぼれ、頬に自分の手ではない手が触れた。

村田くんの手だった。

村田くんは私を真っ直ぐ見て、少し微笑みながら涙をすくってくれた。
そうしてくれたことがとても嬉しくて、
でも村田くんの過去が悲しくて、涙が溢れ続けた。
村田くんは、私が泣き止むまで一緒にいて、涙を拭いてくれていた。

「…うぅ…グスッ…ふぇ…」
泣き続けて、かなりの時間が経った。
でもいまだに村田くんは隣にいてくれた。
しかも頭まで撫でてくれた。
優しく、割れ物を扱うように。
とても心地良かった。

それから少し経ち、私はやっと落ち着いた。

「矢崎さん。…泣いてた理由、聞かせてくれない？」

「うん。いいよ。」
私がそう言うと、村田くんはニッコリ笑ってくれた。
とても優しい笑顔だった。

私が村田くんの話を聞いて思ったこと。
偉いな、苦しかっただろうな、寂しかっただろうな、
…誰かに、手を差し伸べて欲しかっただろうな。
私がもし、その場に居たら、助けてあげたかったな。

私の思いを伝え終わり、そっと村田くんを見ると、目が合った。
すると、私をギュッと抱き締めた。
「むっ、村田くん！？」
突然のことで驚いて声を掛けても、返事はなかった。

…グスッ…

村田くんが鼻をすすった音が聞こえた。
それと同時に、ポタポタと私の肩に村田くんの涙が落ちた。
「村田くん？」
「フッ。やべぇ、俺、泣いてる…」
体を離そうとすると、
「ダメ。…俺泣いてるから。…ダサいから…」
そんなことないよ、そんなことないよ…
「そんなことないよ。」
そう言って私は、村田くんの背中をさすっていた。
そうすると、村田くんは、さっきよりも強く抱き締め、泣いていた。

私は村田くんがしてくれたように、泣き止むまで隣にいて、
泣き止むまで背中をさすり続けた。

過去に触れて…（後書き）

結構、急展開ですね（笑）

これから…（前書き）

第５話です！

もう無理…

これから…

「…ありがと。もう大丈夫だから。」

そう言われ、村田くんの背中をさすっていた手を止めた。
そして、村田くんが、私から体を離した。

「ごめん。いきなりこんなことして。
…でも、矢崎さんの気持ちが嬉しくて…」

そんなこと思ってくれていたなんてわからなかったから、とても嬉しかった。
そして、私は決めた。

「あのさ！これからは、私と一緒にいない？
休み時間とか、お昼の時間とか、いろんな時！！」

村田くんは、口をアングリと開け、訳が分からないという顔をしていた。
でも私は、ニッコリ笑って、

「一緒にいよう？ね？」
「え、どうして？全然わかんないんだけど…」
「どうしてって…友達作る気ないんでしょ？」
「うん…」

まだ村田くんは、『は？』っていう顔をしている。
「でも、私には村田くんの秘密を話した。」
「だから？」
「だから、私には心を開いたってことでしょ？」
私は、違う？という顔をして言った。
すると、
「プッ！そういう意味にとらえたの？」
村田くんは必死に笑いをこらえていた。
それがなんだか憎たらしくて、
「じゃあ、どういう意味！？」
と、少し怒り気味で聞いてみた。
「人と関わるのが面倒だって言ったでしょ？
だから、普通の人が聞いて引くような話して、
引くようなことしたら、離れるかな？と思って」
少しバカにしたように村田くんは言った。
「！！じゃあ、あの話は嘘だったの！？」
「嘘じゃないよ。」
さっきまでのふざけた顔から、急に真剣な顔をして言った。
「嘘じゃない。あの話は嘘じゃない。」

「じゃあ、これからは私と一緒にいよう！
どんな理由があっても。ね？」

私は満面の笑みで言った。

「はぁ…。わかった。」
「よし！じゃあ決まり！」
「はいはい。」
「今からだからね！フフフッ！」
「わかりやしたよ。」

村田くんは呆れ顔だった。
でも私は、そんなのおかまいなしだった。

だって、嬉しかったんだもん。
今まで謎だった村田くんの一面が知れて、それにこれから
もっと村田くんを知れるなんて、嬉しいに決まってる。

これからどんな村田くんが知れるかな？

楽しみだな。

これから…（後書き）

いやーこれからどうなるんでしょうねぇ

自分でもわからない…（笑）

邪魔者（前書き）

キャラの名前が読めないという指摘を頂いたので、
読み方を説明します！

矢崎琥子（やざきここ）、村田泰佑（むらたたいすけ）

です♪

あれから少し経ち、私たちは今も屋上にいた。
もう少しでお昼の時間になる頃だ。

「そういえば村田くんって、伊達メガネなの？」
「さっきそう言ったじゃん。」

村田くんって言い方が結構冷たい。
なんか少し悲しくなる。

「そっか……じゃあ！メガネ外してみて！」
「！！やめろ！！」

メガネに触れようとしていた私の手を勢い良く振り払った。

「あ…ごめん。」

すごく申し訳なさそうな顔をしていた。

「私こそごめんね…。嫌だよね…。」

そうだよね。自分の素顔を知られないようにメガネかけてるんだもんね。

「あ、いや…その、なんていうか…嫌な記憶があるから…」

寂しそうな顔をしてそう言った。

「私に話して。なんでも聞くから」
ニッコリと微笑んで村田くんを見つめた。
すると観念したとでも言うような顔で言った。
「…わかった。話しますよ」
「どんどん話しちゃってください！」
村田くんはやれやれという顔で私を見ている。
「この話もいじめられてる時の話。
そんときに好きだった女子から、『キモイ』って言われたんだ。
それから自分の顔が嫌いになった。それだけ。」
やっぱりそういうことだったのかぁ。
なぁんだ。
「ねぇ。…メガネ外して！！」
満面の笑みでそう言った。
「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」
いきなり大声で言われたからビックリした。
「な、何？」
「何はこっちのセリフだ！
今の俺の話聞いてた？脳みそちゃんとある？耳もある？」

怒っているのか、早口で言った。

「き、聞いてたよ！ちゃんと！」

「じゃあなんでそう言うの！？」

今度は驚きと怒りが混ざっていた。

「…その女の子は、ただ傷つけたかっただけなんじゃないかと思って…」

言ったあと、少し涙がこみ上げた。

それから悪いと思い、うつむいていると、

「はぁ。ホント矢崎さんってわかんない。いきなり泣きそうになるし。」

そう言うと私の顎を上げ、それから自分のメガネに手をかけて、外した。

！！！！！！！！！！

「何その顔？やっぱり矢崎さんもキモイって思うんでしょ？」

私は思いっきり顔を横に振った。

ホントにそんなことない。むしろ、かっこいい！

芸能界にも入れると思う位かっこいい！！

こんなキレイな顔隠すなんて、もったいない。

「…かっこいいよ。…気持ち悪い要素なんてひとつもないよ！」
私がそう言った直後に、村田くんは顔を真っ赤にさせ、うつむいた。
そして、メガネをさっとかけて顔を背けてしまった。
「…ありがと……そんなこと、言われると…思ってなかった…」
村田くんはまた顔を真っ赤にさせてうつむいてしまった。
…なんか新たな一面しれてない？そうだよね？
やったー！というか、二つも知れちゃった！
「じゃあ、ここに二人でいる時はメガネ外して？」
「嫌だ。」
小さい子供がだだこねるみたいに言った。
「いいでしょ？ね？　約束！」
「えー…でも嫌「琥子ーーー！！！」
誰かが私を呼んだせいで村田くんが言ったことが最後まで聞けなかった。
「琥子！！」
麻衣だった。
麻衣は肩で息をして、少し怒り気味で私を見ていた。
「麻衣、どしたの？」
「どしたのじゃないよ！なんでこんな地味メガネといるの？」

麻衣はそう言うと、村田くんを思いっきり睨んでいた。
「琥子はあんたみたいな地味なヤツには似合わない人なの！それ位わかるでしょ！？」
「麻衣！なんてこと言うの！いくらなんでもひどいよ！」
麻衣がそんなこと言うと思わなかった。
ひどい、ひどい、ひどい！！！
「何がひどいのよ！」
「だって村田くんのこと“地味”って！」
「フッ。本当のことじゃない」
「なっ！「すいませんでした。」
私と麻衣が口喧嘩してるところに村田くんが割って言った。
「もう矢崎さんには近づかないし、話しもしません。」
村田くんはそう言った。
ショックだった。やっぱり私って、邪魔だったのかなぁ？
あの約束も最初から守る気なんてなかったのかなぁ？
「わかればいいのよ。ほら、琥子！行くよ。お腹すいたでしょ？」
「……」
私は麻衣に手を引かれて屋上を後にした。
屋上を出るまで、村田くんをずっと見ていたけど、私からは顔が見えないように背けていた。

このまま終わっちゃうのかな？
そんなの嫌だよ。嫌だ！
やっと仲良くなれて、新しい一面も知れたのに…。
気づくと私は、涙を流していた。

邪魔者（後書き）

なんか長くなっちゃいました（；´Д`Ａ、、、

すいません

村田泰佑ｓｉｄｅ－想いー（前書き）

最近、スランプ気味です（ー＿ー；）

村田泰佑ｓｉｄｅ－想い－

ガチャン

矢崎さんは、友達に連れられて屋上を出ていった。その時、矢崎さんは俺をずっと見ていた。

俺は、顔を見れなかった。…というより、見せられなかった。

自分が今、どんな顔をしているかわかってしまった。そう思ったら、見せられなかった。

最初に矢崎さんが屋上に来た時は、ものすごく驚いた。…学校一可愛いと言われている人が目の前にいたのだから。

でも、この手の人と絡むと、良いことがない。だから、そっけない話し方をしていた。

大体の人はこの対応をすると、逃げていく。

でも、矢崎さんは違かった。しかも俺のちょっとした表情まで見抜いた。

珍しい人だと思った。

俺は、今世紀最大のミスを犯したのかもしれない。

今日初めて話した人に過去を言ってしまったり、不覚にも顔を赤くしてしまったり…

なんてことをしてしまったんだろう。

でも、矢崎さんと話せてよかった。というか、嬉しかった。

でも、もっと矢崎さんのこと知りたかったな。矢崎さんのいろんな顔、見たかったな。

でも、もう無理なんだろうな。

でも、前を向けそうな気がする。

明日から…明日も同じ一日だ。

村田泰佑ｓｉｄｅ－想い－（後書き）

ちょっと短いです＾＾；

矢崎　琥子（前書き）

本日二回目の更新です♪

ガサガサ

「どうしたの？食べないの？」

「……」

麻衣は、売店で買ったパンの袋を開けて私にくれた。
それを私は受け取り、パンを食べ始めた。

「そんな浮かない顔しない。…あんたは、自分の存在を分かってないのよ。」

？

自分の存在？何それ。
そう思い、首を傾げていると、

「はぁー…だーかーらー！自分が今、どれだけ人気があるか、分かってないって行ってるの！」

人気？何のこと？さっぱり分からない。

「…麻衣。もっと分かり易く言って。」

「……」

麻衣は、不思議な人を見るような顔で私を見つめていた。
私は何か間違ったことを言ったのか振り返り、アタフタしていると、
麻衣は我に帰ってその瞬間、

「あんたバカ!?こんなに分かり易く言ってるのに!脳みそある!?」

麻衣の最後の言葉を聞いて、村田くんを思い出し寂しくなった。
村田くんは、あれから帰って来ていない。

「…ちょっと。あたしの話聞いてる?」
「あ、ご、ごめん!…聞いてなかった。」

やっちゃった。麻衣、怒ったかな?怒るよね…人の話を聞いてなかったなんて。

「琥子。よく聞いて。あんたは、この学校で一番可愛いって言われてるの。…この学校だけじゃないかもしれない。それに、ファンクラブまであるのよ?自分じゃ分かんないのかもしれないけど、琥子はすごくモテてるの。その琥子が、あの地味メガネといることは、琥子に影響を与えるだけじゃなくて、あの人にも迷惑がかかるの。…そのへん考えて行動して。」

…そうなんだ。村田くんは、私といるでけで迷惑がかかるんだ。
そんなこと考えてなかった。というか、私ってそんなに人気があったんだ…。

「でも、それでも村田くんと一緒にいちゃ、ダメかな?」
「…琥子、アイツが好きなの?」

村田くんを好き!?私が!?

「なっ!す、す、好き!?」

「なわけないよねー。だって琥子、幼なじみのこと好きなんでしょ？」

「そ、そ、そんな！」

…そんなこともあった。いや、今はそんな感情ないし、遠くに引越しちゃったから、全然連絡ないし…

ただ、昔は、家が近所だったし、毎日毎日一緒だったから、好きって思ったけど…

「まぁ、アイツと関わるのはあたしは反対。決めるのは琥子だけど。」

そんな難しいこと言わないでよ…

どうしよう。

もっと村田くんと一緒にいたい。

でも、関わったら村田くんに迷惑がかかる。

…どうしたらいいの？

矢崎　琥子（後書き）

琥子の昔話＆現状の話が出てきました！

琥子はモテモテなんです。

うらやましい～！！

誤解（前書き）

第９話です！

早いですね～

誤解

はぁー…どうしよう…

あれからお昼休みが終わり、もう授業が始まってしまった。私はまだ悩んでいる。
いつもは真面目に受ける授業も、今日ばかりは全然頭に入らない。
どうしよーかなー…
そう思い、ふと、隣に座っている村田くんを見ていると、

「？」

私の視線に気づき、不思議に思ったらしい村田くんが、チラッと見てきた。
その行動に私は我に帰り、今したことがとても恥ずかしくなり、
慌てて前を向くと、

ガシャン！！

…やってしまった。
前を向いたときに注意不足で、手が筆箱に当たり、机から落ちてしまった。

急いで椅子から離れ、散らばったペンを拾っていると…村田くんも拾ってくれていた。

「…ありがと…」

「……」

村田くんも手伝ってくれたおかげで、思ったより早く片付いた。
拾い終わったあと、もう一度お礼を言ったが、やっぱり返事はなかった。

キーンコーンカーンコーン…

授業の終わりのチャイムが鳴り、先生に挨拶をし、掃除の用意をしていると、麻衣に呼ばれた。

「で、どうするか決まったの？」

今、ものすごく聞かれたくない質問をされてしまった。
なんて答えようか迷っていると、

「はぁー…その様子だと決まってないみたいね。」

…図星だ。

「ま、頑張って答えだして。」

麻衣はそう言うと、掃除場所へと行ってしまった。
ぽつん、と残された私はボーッと立っていると、

「琥子ちゃん！掃除始めよう？」
「あ、うん！」

クラスの男子に声を掛けられ、慌てて掃除を始めた。

「はい！ホウキ」
「あ、ありがとう。」
さっき声を掛けてくれた男子がホウキを渡してくれた。
…あれ？私、この人と仲良かったっけ？
そんな疑問を残しながら、その男子と話しながら掃除をしていた。
「そろそろ終わんない？」
誰かがそう言ったとたん、みんなが終わり始めた。
私もホウキをしまおうとしていたら、
「あのさ、琥子ちゃん。…今日の放課後、空いてる？」
さっきの男子がそう言った。
少し考え、放課後空いてることが分かり、
「空いてるよ。」
と、言うと、
「マジで！？じゃあさ、教室で待っててくんない？」
「…うん。」
そう言うと、その男子はすごく嬉しそうな顔をした。
…私、なんか喜ばれるようなことしたっけ？
まぁ、いっか。

放課後、言われた通り教室で待っていると、呼び出した男子が教室に入ってきた。

「お待たせ。」
「全然待ってないよ。」

にこり、と笑って言うと、

「優しいんだね。…でさ、本題に入るけど、」

そういえば、この人の名前をようやく思い出した。
田中くんだ。
田中くんは特に目立った行動もしないし、優しい性格だ。
その田中くんが私に何の用かな？

「あのさ、俺さ、…琥子ちゃんのこと好きなんだ。
…付き合ってくれない？…」

…そういうことか…
とは言っても、実際私は田中くんのことを好きではない。
傷付けないように断るには、どう言えばいいのかな…
そう考え、パッとドアを見ると、

「っ！！」

村田くんがいた。
私が見ているのに気づくと、サッとどこかへ消えてしまった。
それを見て、驚いていると、

「琥子ちゃん？どうしたの？」

「あっ！ごめん。…あの、ごめんなさい！！」

思いっきり頭を下げてそう言うと、

「そっか。ごめんね。時間取らせて。」

上から寂しげな声が降ってきた。

「そ、そんな！…あの、気持ちは嬉しかったよ！」

そう言って、にっこり笑ってみせると、

「ありがと。…じゃあね。」

田中くんは私に手を振って帰っていった。

それをボーッと見つめ、誰もいなくなった教室で私は一人突っ立っていた。

その時、ふと、村田くんを思い出した。

なんか勘違いされたしっまったのではないか、と思い、

どうしようと思っていると、無意識のうちに

『会いたい』

という衝動にかられていた。

そう思うと、いつの間にか私は走っていた。

誤解（後書き）

第９話終わりです！

次回、楽しみにしていてください！

約束（前書き）

更新遅くなって（＊―　―）人ゴメンナサイ

約束

教室を出て走り出した私が向かう先は、一つ。

屋上だ。

絶対、村田くんは屋上にいる。

途中、転びそうになりながらも走った。もっと早く、と思いながら走った。

着いた。…屋上に着いた。

でも、まだ扉を開けていない。扉の前に立っているだけだ。

村田くん、いるだろうか。会いたい。今すぐにでも会いたい。

そしてさっきのこと、どう思ったか聞きたい。

などといろいろ考えていると、目の前の扉が勝手に開いた。

そしてそこにいたのは…村田くんだった。

私はただ突っ立っていた。

村田くんは私に気づくと、ガチャン！という音とともに、屋上へ戻ってしまった。

行っちゃった…。

って！こんなことしてる場合じゃなかった！
私は、村田くんに会いに来たんじゃないか！会うと決めたら会う！
それしかない！
そう思い、扉に手をかけ屋上へ踏み出した。

真っ暗な廊下と比べ、屋上は陽が当たり、眩しい。
思わず目をつぶりそうになるが、目を開き、村田くんの姿を探す。
ふと、目線を横にずらすと、壁にはりついた村田くんがいた。
「わっ！！」
驚いて声を出すと、村田くんは屋上から出ようとした。
「待って！」
私はそう言うと同時に、村田くんの腕を両手で掴んだ。
「村田くん！」
名前を呼んでみたが、反応はなかった。
「こっち向いて？村田くん」
そう言っても私の方を見てはくれなかった。
それなら最終手段だ！と思い、村田くんの前に立った。
村田くんは逃げようとしたが、私に腕を掴まれたままなので逃げられず、目線を横にずらした。

「村田くん。喋っていいよ？」
そう言うと私に顔を向け、
「離して。」
とだけ言った。でも、私は離せなかった。もし、この手を離したら逃げてしまいそうだったから。
そんな考えを村田くんは見透かしたように、
「逃げないから、離して。」
と私の目をしっかりと見て言った。
「ホントに？」
と私も村田くんの目を見て言うと、
「ホントに。」
と言って、首を縦に振り、私を見つめた。
私は、わかったと言って掴んでいた腕を離した。
「じゃあ、あっち行こう？」
それにコクンと頷くと、にっこりと微笑んでくれた。
「どうしたの？　誰かといたんじゃないの？」

「ち、違うの！」

何が違うのか、私にもよくわからなかった。
でも、口からその言葉が勝手に出てきてしまった。

村田くんは、頭にハテナマークを浮かべ、

「何が違うの？」

と聞いてきた。

「あ、いや…その、」

何て言えばいいのかわからなくて、言葉に詰まっていると、

「ゆっくりでいいから、話して？」

と村田くんが言ってくれた。その言葉に少し安心し、うんと頷けば、
また笑ってくれた。

「あ、あのね、村田くん。さっきの見て、どう思った？」

言葉が切れ切れになっちゃったから、うまく伝わっていないかもし
れない。
でも、村田くんには伝わったらしく、答えてくれた。

「矢崎さん？…俺はあれを見て、やっぱりモテるんだなと思ったよ。
」
「え？」

も、モテる？そう言えば、麻衣もそんなこと言ってたな。
私のどこがモテるんだろう、と思い

「私、全然モテないよ！」

と言って、手を顔の前でぶんぶんと振って否定した。

「や、矢崎さん、自覚ないの？」
「自覚？何の！？私、何かした？」

何か悪いことでもしたかなと思い、焦っていると、

「え？…矢崎さん、天然？
…プッ！矢崎さん、やっぱりオモシロ！！」

村田くんはそう言うと、笑い始めた。
私は、村田くんが笑っている理由がわからなくて、オロオロしていた。

「はーおもしろい。……あのさぁ、矢崎さん。」

笑いがおさまったと思ったら、私を真剣な目で見つめ、そう言った。

「ん？何？」

そう聞くと、

「俺やっぱり、矢崎さんといたい。…嫌ならいいんだけど」

私が望んでいたことが、村田くんの口から出てきた。
嬉しい。…でも、
「め、迷惑じゃない？」
麻衣がさっきそう言ってた。私といると迷惑だって。
でも、村田くんは
「迷惑じゃないよ。てゆうかソレ、俺が聞きたい！」
と言って笑ってくれた。それにつられて、私も笑顔になり、
「全然迷惑じゃないよ！むしろ嬉しい！」
と言った。すると村田くんは、
「はぁ～。ムリかと思った。よかった～」
と言ってしゃがみこんだ。そして、
「約束だよ？」
と言って、小指を立てて、私に向けて腕を伸ばした。
私は満面の笑みでこう言った。
「うん！！約束！！」
そして、村田くんの小指に自分の小指を絡めた。
村田くんは笑いながら私を見てくるから、それにつられてまた、私

も笑ってしまった。

今度こそ、この約束は守られる、と思うと嬉しくなった。

今日はいろいろありすぎた。疲れたけど、楽しかった。

明日はどんな一日かな？

約束（後書き）

ちょっと長いです（ー＿ー；）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6998x/

屋上メガネ☆

2011年11月4日20時01分発行